●東京楽所雅楽講座・雅楽公演：プロデュース　野原耕二氏、

宮内庁式部職楽部　多 忠輝（おおのただあき）氏　インタビュー

・初めて雅楽を触れる方に向けて、鑑賞する上でのみどころなどを教えてください。

野原　東京楽所の大和での公演は初で、雅楽が初めての方も多いと思うので、特別に宮内庁式部職楽部の多さんに雅楽の楽器紹介をしていただき、公演を始めたいと思います。一つ一つの楽器についてユーモアを交えながら紹介していただくのでどなたでも楽しめると思います。

今回は、第一部が管絃で雅楽の演奏だけをやります。西洋のオーケストラを見ていると少し違和感があるかと思いますが、一番前列が打物（パーカッション）になります。次に絃楽器があり、管楽器が最後列にいます。なぜかと言うと雅楽には指揮者がいないため、お客さまから見て一番右側の鞨鼓（かっこ）奏者がテンポをとりながら指揮者の役割をやっています。

お客様が一番心配することは、「どこで拍手をしたら良いかがわからない」というところかと思います。鞨鼓奏者は位の高い人がやる楽器で、その人がお辞儀をした時は「拍手」をすると覚えておいていただくと良いと思います。

西洋音楽で勉強をしているとピッチ（※）が 440Hz～442Hz ですが、それより半音くらい雅楽のピッチは低くなっています。ドレミファソラシドとは異なる普段聞き慣れない音階も 1 つの魅力となっています。音楽的な楽しみ方もたくさんありますが、西洋音楽にはない音楽構成で今回は越天楽をやります。

雅楽の魅力は音楽理論の面から見てもすごいのですが、少し難しい言い方ですと「形而上学」、簡単な言い方をすると「雅楽が持っている宇宙観」というところが更に面白いところでもあります。季節によってキーを変えたり、音をわざと少なくするなど、雅楽では色々なことをやっています。

また、舞楽では左から出てくるのが左方（さほう）の舞、右から出てくるのが右方（うほう）の舞といいますが、これを形而上学で方位に転換すると左方は「東」、右方は「西」となるため、必ず左方を舞ってから右方を舞うという決まりがあります。左方の舞は「日輪の舞」、右方の舞は「月輪の舞」と言われ、これも「形而上学」です。自然の摂理に則って進行するのが雅楽です。

10 月 7 日には事前講座の「雅楽はすごい！」も開催しますので、色々お話したいと思います。

※ピッチ・・特定の音の高さを指します。 音の高さは Hz（ヘルツ）という単位で決まり、Hz は「1 秒間に振動する回数」を指します。

・「源氏物語」をテーマに選ばれたことについてお聞かせください。

多　「源氏物語」は物語の中に雅楽がたくさん出てきますので、昔から我々楽人は「源氏物語」に親しみがあります。来年の大河ドラマでも取り上げられ、更に親しみが湧くのではないかと思います。

野原　「源氏物語」は今も色々な書き物が残っており、「源氏絵巻」の世界というと中々想像がつかないと思いますが、まさに大和の公演は「源氏絵巻」の世界が目の前に現れるという内容です。これがポイントになっています。

・東京楽所の魅力についてお聞かせください。

多　宮内庁式部職楽部の半分くらいが東京楽所におり、気の合う人達や弟子、民間の優秀な演奏者が集まっています。他の団体と比べ若い方が多く、非常に「和」のとれた楽団だと思います。雅楽で何が一番大事かと言うと「和」なんです。指揮者がいないため、どこまで「心」が揃えられるか、同じ方向を向けるかが一番大事で、その点では他の団体には絶対負けないだろうなと思っています。

野原　1978 年に東京楽所が出来ました。その頃から伝承者が引き継ぐ舞や音楽に加え、宮内庁では中々行わないような新しい音楽にも挑戦できるために、若い方がいたほうが良いということで若いメンバーが多く、幅広く雅楽の魅力を未来へ繋げていくことを見据えたグループだと思います。リーダーの多さんが良いですからね。（笑）

・演奏するうえで大切にしていることは何でしょうか。

多　先程お話したように、一番は「心」を揃えるということですね。自分たちが今まで研鑽を積んできたこと、自分の師匠から教わってきたこと、先達からいただいたことを後世に伝えていくことが僕らの役目です。その形をまた普及させて、皆さんの前できちんとやっていきたいというところが僕らの主旨ですね。

・長い年月、伝統を引き継いでいる雅楽を、「今」（令和）に奏でるうえで気を付けられていること、時代と共に変化したところなどはありますか。

多　例えば現代の作曲家に委嘱して新しい新作雅楽を、東京楽所も昔は色々な所で随分やりました。ただ、それをあまりにやることによって大元の古典の部分が崩れるようではいけ

ない、丁寧に受け継いだものを伝えていかないと、と僕は思っています。皆さん、耳が肥えて洋楽を聞き慣れていることもあり、その中では音程を綺麗にしていくのは仕方がないと思っています。ただそれを主体にすることにより迫力が無くなる、弱々しくなるのは、本来の雅楽の力強さなどが欠けてしまうことになり本末転倒だと思います。そこら辺のバランスが難しいので気を付けています。

・音楽が持つ力はどんなものだと思いますか？

多　自分が他のジャンルの音楽を聴く時には、音楽で助けられたり勇気をもらえたりと色々なことがありました。本当にありがたく、音楽の力はすごいなと思います。ただ、雅楽に関して僕らは職業でやっている部分もありますので、中々その心境にはなれない部分があります（笑)。どちらかというと代々雅楽を継いでいる家柄ですから、自分の息子をはじめ、、楽部や東京楽所の若い人たちにきっちりしたものを次に伝えていってほしいという思いがあります。一種苦行のようなところが多いかなと思います（笑)。

野原　多さんの立場としては如何に継続して未来に繋げていくかが大事なので、その心境はわかります。雅楽の持っている力が何かというと、西暦 840 年に天皇の命令で日本の音楽をつくりはじめ、150 年をかけ 990 年に完成しました。150 年かけてできた音楽文化である雅楽は 1000 年持つんです。それが根本的なエネルギーの根源だと思います。それだけ時間をかけて編纂した音楽は世の中にないですね。

・公演を楽しみにされているお客様へメッセージをお願いします。

多　「日本の本当の文化って何だろう」ということをまず日本人がわかっていただきだいですし、「日本には雅楽という音楽があるんだな」ということをずっと心に止めておいていただきたいなと思います。

野原　良いホールで、子ども達でも楽しめる本物の雅楽を見てほしいと思っています。公演の前月の 10 月 7 日には事前講座も開催します。是非雅楽を楽しんでいただきたいと思います。